慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	劉大櫆の評価をめぐって
Sub Title	Liu Da-kui: The man and his works
Author	佐藤, 一郎(Sato, Ichiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1990
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.58, (1990. 11) ,p.64- 79
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾大学部文学科開設百年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00580001-0064

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

劉大櫆の評価をめぐって

佐藤一郎

一、序

今日の日本では桐城三祖[1]のうち、劉大櫆がもっとも知名度が低いであろう。始祖の方苞と三祖の姚鼐が共に進士出身者であり、前者は礼部侍郎、後者は刑部郎中まで出世したのに反し劉大櫆はわずかに副貢生の資格を得たに過ぎず、ついに挙人になることもなくその生涯を閉ている。それにもかかわらず生前から文集が刊行されつづけたばかりでなく、明治十四年には日本でも翻刻されてかなり広く流布しているのはなぜであろうか。清代最大の文学流派である桐城派の三祖のひとりというだけではなく、かれの文学の魅力の本質が改めて検討されてよいだけの今日的な問題を含んだ文豪ということができよう。そもそも科挙の試験と学力や文才は、必ずしも一致するとは限らない。状元を獲た者のうち文名が後世までとどろくに至るのは稀であり、逆に落第書生にして大学者や文豪の名をほしいままにするのは決して珍しいことではない。合格の順位も同様にして、学界や文学界での実際の活躍とは無関係であろう。試験には試験向きの型にはまった才能の持主かどうかということと共に、運不運が必ずついてまわるからである。

劉大櫆（一六九八～一七七九）、字は才甫、号は海峰、安徽桐城の人もそのような人のひとりであり、晩年に黄山に

近い黟県（安徽省）の教諭の任にあったのがほとんど唯一の官歴であった。ちなみに侍郎は正二品、郎中は正五品、県教諭は正八品の官である。ただし姚鼐は呂太守本『江寧府志』に四品頂戴とあり、書院の主講としての実績などが考慮されて昇格した。もちろん大櫆は文名が天下にとどろいていた関係で、世間普通のこの程度の経歴の人びとの交際範囲よりはるかにひろい交遊関係を保っていたが、一方では下積の生活体験に加えて庶民層との交流を順調に出世コースを歩んだ学者・文豪たちに比べてより密度の濃厚なものにしている点を指摘しておきたい。この事実がかれの文業に弱者にやゝ同情的な立場をとらせることとなった。また必ずしも儒学の体系のみを絶対視する態度ではなく、老荘学などにも相応の理解を示している。下層知識人として生きた劉大櫆には既成の規範にとらわれない、かなり自由な発想と表現の側面が認められるのである。

さらにその文論の面においては、時代を代表する理論的達成を示しているばかりでなく、今日の文壇にすら一定の影響を及ぼしている。このことは方苞にも姚鼐にも見られない特色であり、劉大櫆の文学の在方を考えるうえで軽視することのできない要素である。方苞の文学をただ単に祖述したのではなく、自覚的に自分自身の体系を目指している面もあるのであって、とかく方苞と姚鼐の陰に隠れがちなかれの文学の再検討を迫るものといえよう。さきに呉孟復選注の『劉大櫆文選』（黄山書社　一九八五年七月）が出版され、八五年の桐城派学術検討会において劉大櫆関連論文が多く発表された事実を踏えて、その達成について考えてみることにしたい。

二、日本での評価

日本における劉大櫆の読まれ方については拙稿「江戸・明治期における桐城派」（『芸文研究』五十四号　一九八九）

でも触たが、その後の研究史を概観しておくことにしよう。現代の日本の研究者で桐城派系の文豪にもっとも注意をはらったのは、橋本循である。その著『中国文学思想論考』（秋田屋　昭和二十三年）は十二篇の論文より成るが、そのうち二篇を「歸震川」と「方望溪」が占めている。しかし劉大櫆以下の桐城派の文章家についての専論はついに書かれていない。網羅的なものとしては清末民国初年に及ぶその盛行ぶりを見近かに体験し観察した今関天彭の『近代支那の学芸』（民友社　昭和六年）、狩野直喜の『清朝の制度と文学』（みすず書房　昭和五十九年）などに、かなり詳細なる叙述がある。ただし前者の桐城派には方苞・姚鼐・曾国藩・呉汝綸・柯劭忞・馬其昶の名が目次に見えるが劉大櫆を欠き、後者に至ってはじめて乾隆・嘉慶時代の古文作家として方苞・劉大櫆・姚鼐の三者が目次に挙るようになるのである。もっともその劉大櫆についての記述は、方苞・姚鼐のそれの数分の一の長さがあるに過ぎない。

桐城の三祖を取上げてほぼ同一の比重を与えているのは、青木正兒の『清代文学評論史』（岩波書店　昭和二十五年）である。同書の第八章「中期以後桐城派其他の文説の一」は方苞・劉大櫆・姚鼐の三者から成り、劉大櫆についてはじめて「論文偶記」を中心に理論家としての面を紹介してこれに批評を加えるに至るのである。しかしながらそれ以降急速に桐城派への関心の比重がわが国の中国研究者の間でも低下し、この傾向は現在に及んでいる。文学革命当時一世を風靡した「桐城の謬種」という否定の極論が、陰に陽に働いているからであろう。大きな影響を民国初年においてすら保持していたのは事実であるが、実際の作品や理論的達成に当りもせずに葬り去ってしまったのでは、伝統文学最後の姿を誤りなく捉えることにはならない。なにが現代文学と断絶しなにが持続しているかが、不明確になってしまう危険性がここには存在するのである。その点からも『気の思想』（東京大学出版会　一九七八）所収の「桐城派における気～詩文論を中心として～」の三石善吉論文、『中国の文学論』（汲古書院　一九八七）所収の「桐城派の文論～載道から

義法へ〜」の宮内保論文の成果は、注目されなければならない。

三、その経歴

まず『清史稿』「文苑二」よりその略歴を掲げて、仕官の文学での挫折の意味を少しく吟味しておくことにしよう。

劉大櫆、字は才甫、一字は耕南、桐城の人なり。曾祖日燿、明末に歙県訓導を官(つと)め、郷里其の高節を仰げり。其の後累世皆諸生と為り、大櫆に至りて益々名有り。始めて年二十余にして、京師に入りぬ。時に方苞、海内の重望を負い、後生の文を以て謁する者を軽しくは許さざるも、独り奇賞に与(あずか)れり。大櫆、雍正中両び副榜に登りしも、竟(つい)に挙を獲ず。乾隆元年、苞薦めて詞科に応ぜしむ。大学士張廷玉黜けて之れを落せしも、已にして悔ぬ。十五年、特に経学を以て薦められしも、復(また)録せられざりき。之れを久しうして黟県教諭に選ばる。数年にして帰を告げ、樅陽江の上(ほとり)に居りて復出でず。年八十三にて卒せり。

大櫆美髯は修幹のごとくにして、能く拳を引きて口に入れぬ。声を縦(ほしい)ままに古の詩文を読み、其の音節を聆(き)きて皆神会理せり。桐城、方苞自りこのかた古文の学を為(おさ)め、時を同じうして戴名世・胡宗緒有り。名世は禍を被り、宗緒は博学なるも名甚だしくは顕れず。大櫆苞門に游び其の義法を伝うと雖ども、才調独り出づ。海峰詩文集を著せり。姚鼐継ぎて起るや、其の学説時に盛行して、尤も大櫆に推服す。世遂に称して方劉姚と曰えり。

以上は『清史稿』に載すその伝記の全文である。その生涯を通観して気付くことは、次の諸点である。

(一) 明末以来ひきつづき下級知識人を輩出してきている家であるが、挙人合格者はまだ一人もいないこと。

(二) 同郷の先輩方苞に評価されその推挙を受けるとともに、後輩の姚鼐に支持されていたこと。

㈢　ついに挙人にはなれなかったが、博学鴻詞科と経学科とに推薦されていること。たとえ選にはもれたにしろ、推薦されただけですでに全国レベルの高級知識人としての側面があったことを示している。県の教諭の職に満足しなかったことは、もとより当然といえよう。この地位は正八品であり、朱沛蓮編著の『清代鼎甲録』（台湾　中華書局　民国五十七）には「猶お今の県教育局長のごとし」と見え、その士大夫としての志を発揮する場としてはあまりにも地位が低かった。

これに対して博学鴻詞科はきわめて名誉ある出世コースである。その概要は『清史稿』「志八十四、選学四、制科・薦擢」[2]の叙述と、商衍鎏著『清代科挙考試述録』（生活読書新知三聯書店　一九五八）「第三章　進士及関於進士系内之各種考試　第七節　制科（博学鴻詞、経済特科、孝廉方正、経学、召試）」の当該箇所の説明によって知ることができる。さらにその要領は狩野直喜『清朝の制度と文学』「総論」のうち、「博学鴻詞科」に拠るのがいっそう便利であろう。博士は次のように述べている。

「清朝に特有なるものは、康熙・乾隆の両朝に行はれたる博学鴻詞の科にして、康熙十八年とそれから雍正帝のとき再たび之れを行う筈なりしが、遷延して乾隆元年及二年に至り行はれたり。是れは科挙が年を定めて規則正しく行はるるに反し、清朝を通じて唯三度行はれたるものにして、全く臨時的のものなり。それから科挙は前に述べる如く、之れに中式する事によりて、挙人若しくは進士の資格を得るものなれども、博学鴻詞の如きは非常の人才を待つ所以にして、この科に応ずるものは、京官にては三品以上、及び科道官員、地方官にありては、督撫布按（乾隆のときは督撫学政と会同し云々とあり）等が各々推薦したる候補者に就き、考試をなすものにして、其の候補者は已に挙人の資格あると否とに関せず。……又た乾隆のときには、一百七十六人を試みて、其の内より僅かに十九人を得たるが、其の内にも杭世駿（大宗）、陳兆崙

（星斎）、沈廷芳（畹叔）、斉召南（次風）等を得。これらの人は清朝の経学や文学に於いて、高い地位を占めている人である。

猶お此の外に経済の科というものあり。是れも乾隆のときに行はれたるものにて、内外の大官に命じ、進士挙人たると否とに関はらず、経学に精通するものあらば、之れを保薦せしむ。之れを試してそれ〴〵官を得たる事あり。この経済科からも随分立派な人物が出て居る。」

康熙のときは百四十七名中より五十人の合格者を出しているのに、乾隆のときには百七十六人中の十九人であるからよほど厳しい。

『清代科挙考試述録』は乾隆の博学鴻詞の科の厳しさについて、次のように述べている。「張廷玉は試事を主（つかさど）り、慎重の名に託して、苛繩隘取し、経史に淹通せる桑調元・顧棟高・程廷祚・沈彤・牛運震・沈炳震、文章詩賦の厲鶚・胡天游・劉大櫆・沈徳潛・李鍇の如き、他には裘日修・錢載等の如き、皆一時の績学能文たる者なるも、俱に末だ選に入らずして、頗（すこぶ）る士林の望を失えり焉。」

すなわち劉大櫆は厲鶚・沈徳潛等と共に、天下の文豪のひとりとして遇されていたのであるが、不幸にして「末だ選に入ら」なかった。それでは選に入った者にはどのような待遇が与えられただろうか。乾隆元年丙辰の試では一等五人、すなわち劉綸・潘安禮・諸錦・于振・杭世駿はひとしく翰林院編修を授かり、二等十人のうち科甲出身者の陳兆崙・劉藻・夏之蓉・周長発・程恂は翰林院検討を、残りの楊度汪・沈廷芳・汪士鋐・陳士璠・齊召南は翰林院庶吉士を授かっている。これは通常の進士の試験ならば、いずれも一甲（状元・榜眼・探花の三名）と二甲上位の成績の者に与えられる中央の超出世コースに乗ったことを意味する。

乾隆二年七月の補試では一等一人万松齢は検討を授かり、二等三人のうち張漢は検討を、朱荃・洪世沢は庶吉士に任ぜられている。以上の例からだけでも博学鴻詞科の選に入った者が、いかに優遇されていたか明かである。

劉大櫆の経歴のうち、中央ともっとも接近したのはこの時であり、栄誉が手のとどくところまで近づいてきたのもこの時であり、この挫折はかれの生涯に深く影を落しているのである。他の者の立身出世を横目で見ながら、ひたすら詩文の道に精進することがかれに残された唯一の生き方となるのだった。

四、その思想性と文学的個性

劉大櫆ははたして方苞の弟子であろうか。かれはたしかに桐城派の学統において大きな地位を占めているが、その学問と文章がほぼ成就してから方苞の愛顧を受けたのであって、いわゆる受業の弟子ではない。魏際昌の『桐城古文学派小史』(河北教育出版社　一九八八)は、第三章の「中継者劉大櫆」の冒頭で次の如く指摘している。

「劉大櫆は桐城派中において方苞から〝中継〟して姚鼐に伝えた三人の創始の人物の一人であると称せられ、方苞もいく度となくかれを〝劉生〟とか〝及門〟とか呼んでいるが、実をいえば方苞は決して大櫆に直伝したわけではなく、それ故大櫆の古文は方苞より得たものだとはなおさらいえないのである。われわれが調べた『望溪文集』及び蘇惇元著の『望溪先生年譜』には、ともに方苞の弟子が記載されているのに、ひと言も大櫆には触ていないのである。」

そうである以上、大櫆の文学が方苞の達成とは異質の側面を備えているとしてもなんら不思議ではなく、むしろ当然だといえよう。かれはほぼ自己の文学が完成してから、同郷の先輩である方苞の知遇を得たのである。大櫆の直弟子呉定の「海峰先生墓誌銘」では、大櫆にはあって苞にはない特色を列挙して次のようにいっている。

「先生の文章は之れを天授に得たり。年二十九、学成りて京師に游びしに、霊皋侍郎見(あい)て之れを驚賞し、其れをして門に拜せしむ。然れども両人の文は各々造(いた)る所を殊にす。霊皋は善く義理を経に択取するも、其の文章に得る所の者は、義法のみ。先生は乃ち其の神気に併わすに、音節尽く之れを得、雄奇恣睢にして、百氏を駆役せり。其の気の肆なる、波瀾の闊大なる、音調の鏗鏘なるは、皆霊皋の逮ばざる所なり。」

謹厳なる方苞にはない自由濶達な劉大櫆の文風をここでは賞揚しており、独立した個性ある風格を確立していたのである。斎藤拙堂も『拙堂文話』巻二で「清人嘖嘖として方望渓の文を称して、推して大家と為せり。余其の集を閲するに、平平として奇無し。」と方苞について断じているが、しかしこの方向こそが清文の主流(3)であった。この清文の主流となった傾向とはかなり異なる風格を、劉大櫆の文章は備えていると断言できるのである。

さらにその思想性についての呉孟復選注本の前言における、次の個処は重大である。「清末の民主的革命思想を持つ学者劉師培はこう指摘している。桐城派の作家のなかで、ただ海峰だけが比較的思想(4)がある《論文雑記》。」

この点についても、章を改めて論ずる必要があろう。かれは文章表現の上で独自の風格を確立しただけではなく、社会のさまざまな矛盾についても鋭敏な反応を示しているのである。

清文の主流の傾向に立つ清末の李慈銘の意見も挙げておかなければならない。かれは劉大櫆の学問的根柢が乏しいにもかかわらず、その〝神気〟を恃んで詩文を作る態度を退けている。『越縵堂読書記』の同治癸亥(一八六三)二月六日の項に『劉海峯文集、詩集』が取上げられているが、この博覧強記の読書家の評価は必ずしも高いとはいえない。もともと李慈銘には才気の勝った詩文家にはあきたらないものがあり、性霊派を代表する文豪の袁枚に対しても「袁子才は小慧を恃みて古を師とせず、其の議論は荒唐なること多し」と退けているのである。『方望渓集』に比べて『劉海峯

文集、詩集』への評価が低いのは、けだし当然といえよう。

「桐城の劉大櫆の詩文は皆家を成す能わず、其の文尤も佳処に乏しくして、稍々気魄有りと雖ども麁疎なること太(あまり)に甚だし。其の生平古人の文法も亦甚だ心に留むるも、作る所は往往にして軌度を軼せり。又或いは摹倣して拙を成せるは、転(うたた)笑う可きこと多し。詩は稍々文より勝れるも、苦(はなはだ)しくは意を作(な)すこと無し。」と酷評している。ただその理想として掲げた文学理論と実作における到達点との落差に注意しているところは、さすがだといわなければならない。

このような酷評の系譜には、清朝最後の考証学者にして革命家としても著名な章炳麟[5]が数えられる。かれも学力の根柢の上に立って、きわめて難解な独自の風格を備えた文章を書く人物であった。現在の日本ではむしろ魯迅の文字学の師としての側面の方が、よく知られているかもしれない。

実をいえば最近もっとも評価されているのは劉大櫆の文章理論家としての側面であるが、明治十四年十一月刊の『海峰文集』八巻　白文本ではその主要論文である「論文偶記」を収録せず、ために日本での劉大櫆理解も不十分なものとならざるを得なかったのである。

それではここで最近の中国における文章理論家としての劉大櫆評価の状況を、整理することにしよう。まず桐城派の文章理論史の専著としては何天傑著の『桐城文派～文章法的総結与超越～』(廣州文化出版社　一九八九)があり、その〝神気説〟の意義を詳細に追求しているのである。

劉大櫆はその〝神気説〟を次のように展開する。その「論文偶記」の冒頭で「文を行るの道は、神を主と為して気之れを輔う」と断じ、〝神〟すなわち霊感を根本として〝気〟すなわち気分は副次的な要素であると説く。方苞の義法理

論と比べて朱子学の正統を擁護するよりも、文人的な自由と個性を強調する傾向が強まるのである。換言すれば載道文学の色彩がよほど薄れてきており、文章の表現技術の分析が飛躍的に進んだのである。「神は文家の宝」であり「神は気の主にして、気は神の用」なのであるから、戴震の気の哲学体系におけるような絶対的な働きは持つべくもない。かれは文章の根本として〈神気〉を強調する一方で〈音節〉[6]と〈字句〉との関係を重視し、この三者を「文の最も精なる處」・「文の稍(やや)粗なる處」・「文の最も粗なる處」と表現してその有機的繋りを説く。このことについては王運熙[7]・顧易生主編の『中国文学批評史』下（上海古籍出版社　一九八五）に詳細にわたる言及があるばかりでなく、現代の文学批評の論拠としても注目されてきたのである。

李国濤の「小説批評与文気説」（『上海文学』八九年三月号掲載）にいう。「桐城派は自分の文章を書く実際の体験を以ってこの理論〔文気説〕に注釈をほどこし、言語上の〝意味を備えた形式〟を樹立しようと意図した。かれらの注釈は〝文気説〟をさらに深く人心に入った体系に形成させた。なかでも影響がもっとも大きいのはおそらく劉大櫆の「論文偶記」であり、文気について説く者で引用しない者はないほどである。文革以降すなわち新時期の研究者は〝文気説〟を科学の范疇に組込むべく努めている。」

現在の中国においては文気説の精華ともいうべき劉大櫆の神気説が、ひろく言語表現の問題に関心のある人びとの注目をあびているのである。文気説の呼称は魏の文帝曹丕の『典論』「論文」に発する歴史があり、梁の劉勰の『文心彫竜』に至って〝風骨論〟すなわち風格論として定着している。劉大櫆の神気説はその系列に立つが、その理論の実作への応用において『文心彫竜』のように難解ではない。さらに「小説批評与文気説」からの引用を続けることにしよう。

「文気は音節の字句のなかに存在している。『劉大櫆はいっている。けだし音節は神気の迹である。字句は音節の矩

である。神気は見ることができないが、音節において見ることができ、音節はなぞらえることができないが、字句を以ってなぞらえることができる』これはおそらく桐城派の文気に対するもっとも標準的な説明である。」

これは劉大櫆の神気説の現代的意義を、もっとも要領よく説明した叙述といえよう。

五、その代表作と理論

それでは神気説は劉大櫆の実作の上に、どのような形で実現されているだろうか。姚鼐は『古文辞類纂』[8]において、次の諸作品を文集中より選んでいる。すなわち論弁類では「息爭」を、序跋類では「海舶三集序」「倪司城詩集序」を、奏議類は大櫆の官吏としての地位が低かったため作品を欠き書説類では採らず、贈序類では「沈朱園序」「送姚姫傳南歸序」を、詔令類もその地位からいって作品を欠き、伝状類では「樵髯傳」「胡孝子傳」「章大家行略」を、雑記類では「浮山記」「寶祠記」「遊淩雲図記」を、箴銘類・頌贊類・辞賦類は採らず、哀祭類では「祭史秉中文」「祭吳文肅公文」「祭舅氏文」を選ぶのである。

また漆緒邦・王凱符選注の『桐城派文選』（安徽人民出版社　一九八四）では、劉大櫆の文集中から「恐吠一首別張渭南」「送姚姫傳南歸序」「馬湘霊詩集序」「程易田詩序」「張弘勛詩集序」「答吳殿麟書」「游晋祠記」「游大慧寺記」「游万柳堂記」「無斎記」「樵髯傳」「騾説」「論文偶記」を選んでいる。

さらに吳孟復選注の『劉大櫆文選』では、「天道」上・下「車喩」「息争」「解毀」「井田」「焚書辨」「難言」一～三「騾説」「読伯夷傳」「書唐学士《徳俠傳》後」「海舶三集序」「程易田詩序」「朱子穎詩集序」「倪司城詩序」「左仲郛詩序」「伯父紛既先生詩序」「葉書山時文序」「送姚姫傳南歸序」「章大家行略」「胡孝子傳」「江先生傳」「張復斎傳」「樵髯

傳」「汪烈女傳」「乞人張氏傳」「舅氏楊君權厝志」「下殤子張十二郎壙銘」「游黄山記」「浮山記」「游晋祠記」「游大慧寺記」「游三游洞記」「游万柳堂記」「游碾玉峽記」「半野園図記」「游凌雲図記」「如意寺記」「祭望溪先生文」「祭左繭斎文」「祭張閑中文」をその代表作として収録している。

以上の諸例からも容易に窺うことができるように、劉大櫆がもっとも得意とした分野は序跋類・伝状類・雑記類・哀祭類に属する文章であり、ここにかれの理想とする神気が発揮されたものといえよう。神気の理論は天下国家や哲学・歴史を論ずるよりも身近かな人間や自然さらには事物を論ずるのにふさわしく、方苞の義法理論よりも散文の芸術性の重視に傾く。経書について談じ道を説かないわけではないが、方苞のいう義の意識、すなわち載道の観念が稀薄なことは否定できない。

劉大櫆は「論文偶記」[9]において芸術的散文成立のための独自の条件を数えあげ、文章作家の感性の在り方と表現の仕方のあるべき姿を説く。「理は以て直ちに指す可からざるなり、故に物に即して以て理を明かにす。情は以て顕かに出だす可らざるなり、故に事に即して以て情を寓(たく)す」のであって、道徳や学問がただちに優越することにはならないのである。劉大櫆こそは桐城派系列中の芸術派と呼ぶにふさわしい存在であり、それ故にこそ江戸期の儒学に基づく道徳と学問の色彩の薄れた明治の漢詩文界の人びとに、改めて迎えられたものと思えるのである。

六、二三の代表作を通して

桐城派の祖方苞が祖籍だけで実際には生れたときから居住していなかったのに対し、劉大櫆はその生涯のほとんどを桐城（現代の桐城・樅陽の両県の範囲）の故郷で過している。何天傑の『桐城文派』では「桐城は安徽省西南部の畳畳

たる群山の中に位いす。県境の内は、翠峰迤邐、林壑幽深、緑水縈回、風景奇偉にして又秀麗なり」と文言調で描写しているが、これはただ単なる形容ではなくほぼ実景といってよかろう。桐城の文豪戴名世は「桐城は深山の中に居り、地方百余里、一面は江に浜して、羣山之れを環り、山連なること千余里に亘る。」（子遺録）と叙述している。とはいえ山間の小県ではなく、豊かな耕地の広がりの周辺を丘陵が取囲み、清流が貫いているという光景を一九八五年の桐城派学術検討会に参加して、筆者はこの眼で確認している。わが鴨川ほどの川幅を持つ川底の石が数えられるような清流と全山奇厳から構成されている浮山の存在は、劉大櫆の遊記への興味をそそったことであろう。その「浮山記」のごときはたびたび歩を運んだ故郷の勝景をたたえる遊記たるにふさわしく、その描写の筆はただちに断崖や岩石のたたずまいの実相に迫り、四季それぞれの味わいの違いにまで説き及んでいる。「黄山に游ぶの記」や「晋祠に游ぶの記」の場合のように同行者の名もなければ、「大慧寺に游ぶの記」や「万柳堂に游ぶの記」におけるように自分の感慨・意見に傾くこともない。また游の字を浮山の上に冠することもしないのは、あまりにも親しんできた場所だからだろうか。

「浮山記」の冒頭に見える華厳寺の堂宇は今日では亡び、僅かに石仏にその跡をとどむるのみであるが、金谷岩・会勝岩・連雲峡・壁立岩などの奇岩怪石はかれの麗筆によって千古にその名を伝えている。黄山のように海外に知られた天下の名勝でもないのに、今日でもこの山を想起する人があるとすれば、まさしく文章は千古の事というべきであろう。なお戴名世に「遊浮山記」、方苞にも「再至浮山記」があるが、この「浮山記」のように山の全容を明かにする方向を持つ内容ではない。

次にその多少の思想的意義について検討しておきたい。「乞人張氏傳」「樵髯傳」「騾説」のように、下級の知識人として生きたのでなければ絶対に看破できない体の作品があることは注意されなければならない。「乞人張氏傳」の冒頭

の「楚の南、天地の気は、人に鍾らずして、石に鍾まれり。流沙の西、天地の気は、人に鍾らずして、鴻雁に鍾まれり。近世以来、天地の気は、士大夫に鍾らずして、窮餓行乞の人に鍾れり。」

その内容だけではなく、一種のリズムが読者の胸に伝わってくるが、この「近世以来」という指摘によって現状への批判の性格が明確になっている。この冒頭の文章は結末の「夫れ天地の気は、鍾る所無き能わざるなり。明の亡ぶや、金陵の乞人之れを聞きて水に赴きて以て死せり。丈夫能わずして、乞人之れを能くす、亦慨く可きかな」と呼応することによって、批判精神がますます鮮明に打出されるのである。

七、余説

考えて見るに桐城三祖のうち劉大櫆の文章が明治の初年において特に岸田吟香によって取上げられ、かなりの発行部数を記録して各地の図書館などに所蔵されており、また本城問亭などの愛読するところとなっているのは何故であろうか。一つには載道主義の傾向がもっとも稀薄であって、文人的気風に富むことが挙げられよう。二つには新しい文明開化の時代の民主主義思想に多少なりとも共通する思想性があるといえばこれはいい過ぎであろうか。刊行者の岸田吟香のごときは、国士の側面を備えた新しい時代の寵児であった。明治になって儒教主義の立場が後退して文学の独立性を強調するような時代思潮がひろまるのであるが、これと劉大櫆の愛好者の増大はなんらかの関連があるものと思えるのである。

それから百年以上経った平成の今日、はたして劉大櫆再評価の動きが中国から日本の研究者の間にひろまるかどうか、静かにその動向を見守ってゆくことにしよう。

注

(1) 『広辞苑』第三版にいう。「桐城派」清代の古文の一派。安徽省桐城の人方苞に始まり、劉大櫆・姚鼐(だい)はその代表者。

(2) 『清史稿』「志八十四選挙四制科薦擢」の記事にいう。

雍正十一年詔曰、博学鴻詞之科、所以待卓越淹通之士。康熙十七年、特詔薦挙召試授職、得人極盛。

博学鴻詞について『中国の歴史』全十五巻の著者でもある陳舜臣は、『中国画人伝』(新潮社　一九八四)中で次のように述べる。「(法若真は)河南・安徽だけでなく、福建でも行政の長官をつとめた。行政の第一線にあれば、複雑な人間関係を、あるていどうまくこなさねばならない。康熙十八年に博学鴻詞(大学者であることの名誉称号)に挙げられているが、これは世評、実力以外に、宮廷関係のコネがものをいう。法若真は如才のない社交家という仮面の下に、妥協を許さぬきびしい自我をひめていたのだ。」

ちなみに法若真は順治三年の進士。

姚鼐と親しい文豪袁枚も博学鴻詞には通らなかった。姚鼐の「袁随園君墓志銘并序」(『惜抱軒集』巻十三)にいう。「年二十一、自錢塘至廣西、省叔父于巡撫幕中、巡撫金公鉄一見異之。試以銅鼓賦、立就、甚瑰麗。会開博学鴻詞科、即挙君。時挙二百餘人、惟君最少。及試、報罷。」この墓志銘を書いた姚鼐には、師の劉大櫆不合格の事実が想起された筈である。

(3) 拙著『中国文章論』(研文出版　一九八八)所収の「清の詩文」「方苞の散文―その形成をめぐって」「戴名世・方苞の交遊より見たる桐城派古文の成立」の各章参照。

(4) 現代の思想家劉師培の劉大櫆評「凡桐城古文家、無不治宋儒之学以欺世盗名。惟海峰稍有思想。若方東樹・方宗誠・曾国藩、皆治宋学復以能文鳴。」(「論文雑記」『劉甲叔先生遺書』二所収　華世出版社　台湾　一九七五)この項の調査は、劉師培の研究者である嵯峨隆氏を煩わした。

(5) 章炳麟が「劉大櫆はいささかも取るべき所がない。桐城派の面々は彼が姚の先生であること、桐城派の人であることによって深い考えもなしに桐城派に入れてしまった」(『国学概論』)と手厳しく批判している……(三石善吉論文『気の思想』所収　東京大学出版会)

なお章炳麟の清文に対する評価については、『章氏叢書』「文録」二所収「与人論文書」参照。

(6) 縦声読古詩文、聆其音節、皆神会理解。(『清史稿』「列伝」二百七十二「文苑」二)

(7) 王運熙著『中国古代文論管窺』(斉魯書社　一九八七) 所収の「中国古代文論中的文気説」は、清代に降って劉大櫆と姚鼐に言及する。

(8) 『古文辞類纂』の意義については、顧易生編『中国十二大散文家』(上海古籍出版社　一九九一) 所収の拙稿「姚鼐」参照。桐城派全般の問題点については『桐城派研究論文選』(黄山書社　一九八九) 所収の拙稿「関于桐城派的幾個問題」参照。

(9) 徐中玉主編、顧易生・呉熊和・斉森華副主編『古文鑑賞大辞典』(浙江教育出版社　一九八九) は、劉大櫆の作品中より、「論文偶記」のみを選んでいる。

「論文偶記」〈鑒賞〉の項目の筆者張少康は、次の如く述べる。

劉大櫆是方苞的得意門生、他在「論文偶記」中対散文写作的芸術表現問題、作了相当精深的探討。他認為「義理・書巻・経済者、行文之実、若行文自另是一事。」指出文章写作中内容固然具有主導作用、然而芸術表現本身、又有其相対独立性。若無善于設施的本領、則不能成器。故「論文偶記」之重点在説明怎様才能体現出〃成風尽亟〃的高超手段。

劉大櫆認為散文芸術的最高美学標準是神與気的自然流露。神是指文章中能充分体現作家精神面貌特徴的自然神理。気是指体現這種精神面貌特徴、符合于作家個性、気質的行文之気勢。

なお同書では桐城派の古文作家より、次の諸作品を採る。戴名世の「醉郷記」、方苞の「左忠毅公逸事」「獄中雑記」、劉大櫆の「論文偶記」、姚鼐の「登泰山記」「復魯絜非書」「袁随園君墓志銘并序」「游媚筆泉記」、劉開の「問説」、曾国藩の「養晦堂記」、薛福成の「觀巴黎油画記」、林紓の「春覚斎論文選」「撒克遜劫後英雄略序」、厳復の「訳天演論自序」「原強」。

⊙近刊の横田輝俊著『中国近世文学評論史』(渓水社　一九九〇) に、「桐城派の古文論」「曾国藩の古文論」が収められている。